

の塔にあつた大きい顔容、市門にあるものや、今一つの大遺跡にあるものは別としても、之等が何であるかを定める鍵を得るに至つた事である。——今一つの遺跡といふのも、確かに佛教のもので、カンボヂアの北方にあるバンテアイ・クマル Banteay-Chmar の寺院の事である。——今日まで、此の謎を解き得たと云ひ得る者はなく、初めには、之を梵天であると考へたのであるが、之は其の四個といふ數によつたのであるけれども、印度に於てさへ、梵天崇拜は殆んど何の役目をもなさない。次いで、濕婆神であるとせざるを得なくなつたが、其の爲には、印度の関係様式を以てすれば五個でなければならぬ事となる。終に、フノ氏が最も満足な一解決をしてゐるので、同氏と共に、余は、之等の神祕的な人を迎へる微笑を湛へてゐる大きな姿は、ローケーシユヴラ菩薩、即ち、觀音であると云ひたいのである。

更に長く述べるのは本意でないが、唯一言しておきたいと思ふ。若し、之等成立の途にある科學的學説が、諸君の注意を惹くに足りたとし、又、之等恢復中にある建物が、諸君の意に副うたとすれば、之を容易に見る事が出来、